小説における主題のない文

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 明治大学教養論集刊行会
	公開日: 2020-07-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石出, 靖雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20994

明治大学教養論集　通巻546号
(2020・3)　pp. 1-23

小説における主題のない文

石　出　靖　雄

1　はじめに

日本語の文においては、いわゆる主題を表す「は」が用いられている文とそうでない文がある。近代小説を対象に調査したところ、主題を表す「は」が用いられていない文の方が少ないことが確認できた。本稿は、主題を表す「は」の用いられない文はどのような場合に現れるのかを調査し、主題の現れない事情を考察するのが目的である。

対象としたテクストは、以下の10編である。

『日本近代短編小説選　明治編2』(紅野敏郎等編 2013年　岩波文庫)
　志賀直哉(1910)「剃刀」、島崎藤村(1909)「一夜」
『日本近代短編小説選　大正編』(紅野敏郎等編 2012年　岩波文庫)
　久米正雄(1918)「虎」、菊池寛(1921)「入れ札」
『日本近代短編小説選　昭和編1』(紅野敏郎等編 2012年　岩波文庫)
　室生犀星(1934)「あにいもうと」、宮本百合子(1937)「築地河岸」
『日本近代短編小説選　昭和編2』(紅野敏郎等編 2012年　岩波文庫)
　野間宏(1947)「顔の中の赤い月」、坂口安吾(1947)「桜の森の満開の下」
『日本近代短編小説選　昭和編3』(紅野敏郎等編 2012年　岩波文庫)
　吉行淳之介(1954)「驟雨」、幸田文(1954)「黒い裾」

明治前期までの文章は主に平安時代の語法で書かれたため、話し言葉と書き言葉の隔たりが生じていた。そこで、書き言葉を話し言葉に近づける新たな文体を作ろうとする言文一致運動が起こり、小説でも種々の文体が試された。1900年代に入り、現在の言文一致体が用いられるのが一般的になり、同時に文末形式も現在の形式とほぼ同じものとなった。

本稿では、言文一致体が落ち着き現代とほぼ同じ文体となった1900年以降から昭和までを対象とした。

対象としたテクストはすべて、いわゆる三人称小説で物語世界外の語り手が語るものである。

2　主題

主題について日本文法学会編（2014）『日本語文法事典』（大修館）では、次のように記述されている。

> 文中のある要素を提示する成分で、後続部分とともに「～については～」という関係を表すものをいう。助詞の「は」によって表されるのが代表的である。
>
> ①山田さんは弁護士です。
>
> ②食器は戻しておいてください。
>
> という例文で言えば、「山田さん」について「弁護士だ」という説明を加えたり、「食器」について、「戻しておく」ことを要請するという関係を表している。
>
> （丹羽哲也　執筆）

ここで重要だと考えられるのは、文が二つの部分に分けられるということである。

3　調査データ

対象とした小説の地の文について、主題があるかどうかを一文ずつ調査した。その結果、表1のように主題のない文は3%～30%程度であることが確認された。

表1　全体の調査結果

	地の文	主題のない文	割合
志賀直哉「剃刀」	198	36	18.2%
島崎藤村「一夜」	139	26	18.7%
久米正雄「虎」	183	13	7.1%
菊池寛「入れ札」	208	30	14.4%
室生犀星「あにいもうと」	178	7	3.9%
宮本百合子「築地河岸」	103	28	27.2%
野間宏「顔の中の赤い月」	449	64	14.3%
坂口安吾「桜の森の満開の下」	435	70	16.1%
吉行淳之介「驟雨」	342	74	21.6%
幸田文「黒い裾」	304	67	22.0%

3　主題のない文の性質

主題のない文は、主題のある文と比較してどのような特徴があるのか、まず確認しておきたい。

3.1　主題のない文の構造

主題のある文は、「主題―叙述」という構造であり、「主題」と「叙述」と

いう二つの部分を結びつけるときに表現主体の判断が働いていると考えられる。主題のない文は、「主題―叙述」という構造でなく、「φ―叙述」という構造であり、一つの部分だけからなっている。この際、主題のある文を有題文といい、主題のない文を無題文ということが一般的である。また、有題文を判断文とし、無題文を現象文とすることも多く見られる。

しかし、野田（1996：84）では、有題文と無題文の区別は、現象文と判断文の区別と規定の仕方が違うと述べている。無題文と有題文の違いは、主題があるかないかという文法の問題だといえる。それに対して、現象文と判断文の違いは、言表の内容の問題（主観的か客観的か）であり、モダリティのありようの問題と考えられるのである。

3.2　現象文と「主題のない文」

名詞文は、原則として有題文と考えられる。名詞文の基本型は「AはBだ。」だと考えられるからである。確かに、一語文や下の例のように無題文のときもある。

　隣が火事だ。

しかし、この場合は状況を前提としての発話である。本稿では、「名詞文は有題文であるのが原則であるが、無題文のときがある。」としておきたい。

　猫は布団の上で寝ている。

この文は、主題の「は」があるのでいわゆる判断文とされる。しかし、語られている内容は、その場で知覚した内容である。いっぽうで、猫の状態について判断した文だということもできる。

猫が布団の上で寝ている。

この文は現象文あるいは描写文といわれる。しかし、言語にしたその時点で、判断が働いているのだということもできる。

やはり、現象文（描写文）と判断文の区別を、主題の有無で判定するというのは、基準の置き方に問題があると考えられる。

しかし、それでは、主題のある文と主題のない文では何が違うのか。それは、文が二つの部分に分けられるかどうかということである。

4　主題のない文の現れる多くの場合

今回の調査範囲で主題のない文を調査したところ、主題のない文は次のような時に出現していた。

(1) 知覚した情報を、(論理的操作を行わずに) 表出する場合

知覚体験性・眼前描写性のある語りのときに、主題のない文がよく見られた。知覚体験性・眼前描写性のある語りとは、誰かが、その場で知覚して語っていると感じられる文のことで、作中人物が知覚して語っているような場合と、語り手が物語世界の現場にいるかのように語っている場合とがある。しかし、後者の場合は、語り手の設定次第である。

地の文のなかには、作中人物の知覚した内容を情報源として語り手が語る場合がある。この語りは、語り手の語りではあるが、作中人物の知覚した内容が示されている。知覚した内容を語るだけという点で、知覚体験性・眼前描写性のある語りと共通している。この場合も、主題がない文になることがある。

発言が引用されてカギカッコで示される場合、発言を提出するために「…という。」「…といった。」などの形式をとる文がある。このような文では、

主題がないことが多い。作中人物はその場でその内容を聞いていることが多いため、知覚した内容を語る文の一つということができるだろう。

このように、知覚した情報を提出する際に、主題のない文が多く見られる。

(2) 語り手が物語世界の具体的事態を事実として語る場合

物語世界の具体的な場面が設定されていて、その場面における具体的な事態や状態を語り手が事実として語るとき、主題のない文になることがある。しかし、用例はあまり多くない。

発言引用の一部は、語り手が事実として発言を提示していると考えられる場合がある。

(3) 非情物主語の文の場合

抽象的な事物などの非情物が主語となる文のときに、主題のない文が見られた。特に、いわゆる欧文直訳体の文のときには主題のない場合が多い。英語の文は、「主題―叙述」でなく「主語―述語」という形式をとるが、欧文直訳体の文もそのような形式をとることが多い。

(4) 文脈の中に前提・テーマがある。

文章や段落全体のなかに、大まかな前提やテーマがあり、それに関わる内容が語られる場合に主題のない文が見られる。この場合、一文だけ単独で取り上げると意味が不十分に感じられる。また、その前提やテーマを明瞭な言葉で補うことが難しいことがある。

(5) 文構造に関係する場合

・述語部分が主題の場合。

「いたずらをしたのは誰だ。」という問いに対して「彼がいたずらをし

た。」と答える場合には、主題は述語部分の「いたずらをした（のは)」だと考えられる。分裂文などと呼ばれている文である。この場合、「は」などで示される主題はないため、主題のない文に見える。

・条件節など、主題の代わりとなるようなものがある場合。

例えば「ボタンを押すと、音が出る。」では、条件節が前提となり、主節は主題のない文になっている。

・「のだ」文等の場合。

「のだ」に前接する節部分には主題がない場合がよく見られる。「のだ」文は文脈と密接な関係があり、詳細については別稿で論じたい。他にも「わけだ」「だけだ」「ばかりだ」「からだ」等の文末をもつ文も同様であり、本稿では詳しく扱うことはしない。

5　主題がない文が現れる用例

具体的に用例を確認しながら、主題のない文が現れる事情を探っていく。

5.1　知覚した情報を、（論理的操作を行わずに）表出するもの

以下に述べる①〜③が、主題のない文の大部分を占める。

① 知覚体験性・眼前描写性のある文

誰かが、その場で知覚して語っているように感じられる文では、主題が示されないことがよくある。作中人物が知覚して語っているような場合と、語り手が物語世界の現場にいるかのように語っている場合がある。

次の例の三つの下線部の文がそれにあたる。

【1】

<u>また硝子戸が開いた</u>。

「竜土の山田ですが、旦那様が明日の晩から御旅行を遊ばすんですか

ら、夕方までにこれを砥いで置いて下さい。私か取りに来ます」女の声だ。

「今日はちっとたて込んでいるんですが、明日の朝のうちじゃいけませんか？」と兼次郎の声がする。

（「剃刀」26-28）

1文目の下線部は、作中人物が物語世界の「いま、ここ」で知覚した内容を言語化したものである。「～が開いた」のように文末がタ形であるが、遠い過去のことを表したわけではなく、近過去（完了）を表していて、たった今起こったこととして言語化していると考えられる。このような場合、眼前で知覚しているかのように、あるいは現在体験しているかのような語りであることから、眼前描写あるいは知覚体験性のある語りと呼ばれる。

また、眼前描写の文は、第三者の視点で客観的に表現するのではなく、自分の個人的な視点で表現しているといえる。「～は～である。」「～は～する。」のように二項目によって構成されている文は、二つの項目を客体としてとらえ、その二項目を結びつけることで文が成り立つ。そのため、第三者の視点で客観的に表現した文だといってよい。それに対して、眼前描写の一項目だけの文は、知覚した物事を提示するだけの文となっている。

二つ目の下線部と三つ目の下線部も同様に、作中人物の知覚した内容を提示した眼前描写である。

② 作中人物の知覚を利用した文

語り手の語りであるが、作中人物の知覚した内容を情報源として語る文がある。この文のなかには、「～は～。」というような、二つの要素を客体化して関係づけるという構造をもたず、作中人物が知覚した事態を表現しているものがある。②は既に述べた①と連続的である。「いま、ここ」で知覚して語っているような表現の場合は①とし、「いま、ここ」で語っているとは

言えない場合は②としたが、判断の難しい場合もある。

なお、主題が省略されていると考えられる場合は、「主題がない文」とはしない。

②「作中人物の知覚を利用した語り」は、文末がタ形であることによって、作中人物が語っているのではなく語り手が語っていることが明らかになっている文が多い。この場合も作中人物が知覚して捉えた事態についての語りであり、それをさらに語り手が客体化して語っているのである。次のような例である。

【2】

お梅は粥を煮て置いた。それの冷えぬ内に食べさせたいと思ったが疲れ切って眠っているものを起してまた不機嫌にするのもと考え、控えていた。八時頃になった。余り遅れると薬までが順遅れになるからと無理にゆり起した。芳三郎もそれほど不機嫌でなく起き直って食事をした。そうして横になると直ぐまた眠入ってしまった。

（「剃刀」63-68）

下線部は、お梅の知覚を利用した語りであるが、「～は」による主題のない文である。ちなみに、【2】の最後の文も知覚利用の語りであるが、「芳三郎は」が省略されていると考えられるので、主題のない文とはしない。

③ 引用構文

引用構文は原則として発言を提出する文である。そのため、語り手による論理的操作はなく、発言という具体的な出来事内容を、一項目で提示していることになる。前掲【1】の用例の３番目の下線部は知覚体験性がある引用構文である。

発言内容というものは、物語世界のその現場に居合わせた作中人物に聞か

れているのが一般的である。そのため、「③引用構文発言」は、発言の聞き手が知覚した「①知覚体験性・眼前描写性のある語り」あるいは「②作中人物の知覚を利用した語り」であることが多い。それにより、引用構文は主題がないことが多いのだと考えられる。

5.2　語り手が物語世界の事態を事実として語るもの

物語世界の具体的な事態や状態を語る場合に、主題のない文となることがある。しかし、5.1で挙げた①～③に比べて用例はあまり多くは見られない。次のような場合である。

④ 事実の提示

物語世界の具体的な場面において事態や状態を語るときに、主題が示されない場合がある。

【3】（下線部は主題のない文）

忠次は口を噤んだまま、何とも答えなかった。親分と乾児との間に、不安な沈黙が暫らく続いた。

「ああ、いい事があらあ」

釈迦の十蔵と云う未だ二十二三の男が叫んだ。彼は忠次の盃を貰ってから未だ二年にもなっていなかった。

「籤引がいいや、みんなで籤を引いて、当った者が親分のお供をするのがいいや」

当座の妙案なので、忠次も乾児達も、十蔵の方を一寸見た。が、嘉助という男が直ぐ反対した。

「何を云ってやがるんだい！　籤引だって！

（「入れ札」63-68）

下線部1文目は、事態の客観的描写であり、知覚利用とはいえない。下線部2文目、3文目も、事態の客観的描写である。知覚利用の語りといえなくはないが、語り手が語り手の立場で語る語りと考えられる。特に、「釈迦の十蔵と云う未だ二十二三の男が」「嘉助という男が」のように「という」という表現から、語り手の立場が強いと言える。物語世界に居合わせている人物は、互いに見知っており「という」表現を用いないはずだからである。

2文目は、引用構文の変形である。

少なくとも下線部の1文目、3文目は、物語世界の事態を語り手が語り手の立場で叙述する文である。瞬間的な出来事ではなく、ある程度の時間の経過を要する出来事を、ひとまとまりの事態として時間を捨象して語っている。眼前描写性・知覚体験性はない。語り手の語りと考えるのが妥当である。事態を対象化してとらえた客観的な語りあり、主観的に知覚した物事をそのまま表出したものではない。つまり、語り手が、物語世界の現場で直接知覚して語っているような語りではない。直接知覚したものでない内容を、語り手が語り手の立場で語ることによって、その語られた内容は物語世界の動かせない事実として扱われる。例えば、下線部1文目「親分と乾児との間に、不安な沈黙が暫らく続いた」は、物語世界の客観的な事実として読者は受けとる。誰かの主観的な知覚だとは受けとらない。この用法を、以後「事実の提示」と呼ぶこととする。

事実を提示するとき、多くの場合「～は」などによって主題が示されている。例えば【3】の用例の1文目「忠次は口を噤んだまま、何とも答えなかった」は、「忠治は」という主題がある。

しかし、下線部1文目「親分と乾児との間に、不安な沈黙が暫らく続いた」は、二つの部分に分かれておらず一項目からなっている。その事情はどのようなものか。仮説ではあるが、次のように考えることができる。

下線部1文目は物語世界の状況を描写しているが、主題なしで事実だけを提示している。聞き手に対して、状況はこのようなものだと事実を提示して

いると言える。つまり、「状況は～である」という枠を、語り手と聞き手があらかじめ認識しているのではないだろうか。つまり、「状況は」「～である」という二項目が潜在的に存在するのではないかということである。

次の用例も、状況を語る「事実の提示」である。

【4】

疑わしいと思う奴は、自分で調べて見るといいや」喜蔵は最後の決定を伝えながら、一座を見廻した。

誰も調べて見ようとはしなかった。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思い通りの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上った。

（「入れ札」164-167）

この下線部も客観的な事実を語る文である。事態が展開していく中で、読者は自然と次に起こる状況を予期することになるが、それを前提として語り手は新しい事実を提示している。つまり、前提が存在しているのである。

また、この文は単独では不完全な文であり、完全な文とするには、何を調べてみるのかという「ヲ格」が必須だと考えられる。しかし、文脈からわかるのでヲ格を示す必要がない。文脈に頼った文であり、文脈の中で必要な事実のみを提示しているのである。文脈に頼った文では、語り手と聞き手の間に表現されていない了解事項があるため、主題のない文が現れやすい。

次の用例は、段落の冒頭に「事実の提示」が現れている。

【5】

山の長い冬が終り、山のてっぺんの方や谷のくぼみに樹の陰に雪はポツポツ残っていましたが、やがて花の季節が訪れようとして春のき

ざしが空いちめんにかがやいていました。

今年、桜の花が咲いたら、と、彼は考えました。

（「桜の森の満開の下」73-74）

下線部は、段落のはじめの部分で、物語の具体的場面の季節や状況の設定が示されている。主題は示されていないが、「そこの場所は」のようなものが主題として考えられる。下線部が一文だけで存在した場合、「それは何についての状態なのか」という質問をすることになる。つまり、前提が必要である。この用例の場合は、この段落の前に文脈があり物語の展開は聞き手に了解されている。そのうえで、この段落ではある場面の状況が新しく設定され語られるという予想がなされる。そのため、質問をせずに語られた内容を受け入れることができる。その結果、主題が明示されなくともよいということになるのだろう。

野田（1996：91）では、このような文を現象叙述型として、使われる位置について「文章・談話の初めや段落の初めなど、前の文脈とのつながりがなく、話題がかわるところが多い」と指摘している。このような文が段落はじめに置かれるのは、これから「状況について説明する」ということが聞き手に予想されやすいためだと考えられる。段落の初めであれば、「状況は」という主題を明示しない一項目の文でも、何について語っているのか自然と理解されやすいのである。

5.3　非情物主語の文の場合

⑤ 非情物主語の文

次の下線部のように、抽象的な事物などの非情物が主語となるきに主題のない文が見られる。

【6】

りきは小畑からの名刺を出して見せたが、しばらく見詰めたあと、こんなもの、あたしに用はないわといい細かく静かに裂いてしまった。そしてうつ向いてしくしく欷き出した。すっかり欷いてしまうと元のままのもんになり、横坐りをして自分で自分を邪魔者にするような、だるそうな顔つきをしてりきに言った。

——あたし妙になったのかも知れないわ。

からだがだるくて。

——まさかお前またあれじゃないだろうね。

——まあ、

と、もんは笑ってしまった。

わざとらしい笑い様がりきの心をしめつけた。そんなことだったら家へなんかかえって来ないわ、あたしこれでも母さんの顔が見たくなってくるのよ、悪いことをしても善いことをしてもやはり変に来たくなるわ、あんな、いやな兄さんにだってちょっと顔が見たくなることがあるんですものと、もんはそれを本統の気持から言った。

（「あにいもうと」162-167）

下線部は、抽象的なものが主語となった欧文直訳体の文である。人を主語とすると「わざとらしい笑い様にりきは心がしめつけられた」となる。

「りき」を主語とすると次のようになる。

(1)「りきは」—「わざとらしい笑い様に心をしめつけられた」

(2)「りきがわざとらしい笑い様に心をしめつけられた」

この場合、「りきは」という主題のある文が自然であり、「りきが」を主語にするとやや不自然に感じられる。しかし、「りきが」でなく非情物を主語

にすることによって、原文のように主題のない一項目の文が不自然に感じられなくなる。(2) の文は、「誰がわざとらしい笑い様に心をしめつけられたのか」の答えとして、あるいは「何が起こったのか。」の答えとしてならば成り立つ。だが、そのような前提のないこの文脈の中では、(2) の文は成り立ちにくい。しかし、原文の非情物主語の文は、この文脈の中で、文全体を焦点とする文（中立叙述の文）として成り立っている。（この理由については別稿で論じたい。）

この用例の場合、原文のような非情物主語にせずに (1) のような文にすることもできるが、非情物主語の文であることによって次のようなメリットがあると思われる。

最後の段落は、全体的にもんが主題となっている。あるいは視点がもんになっている。「りきは」にすると、もんとりきの対比のようにみえることになるだろう。「りき」を主題にする文では、「りき」についての説明という印象が強くなる。それに対して、原文のように非情物主語の文であることにより、状況について語る文としての印象が強くなる。

このように、「⑤非情物主語の文」は、一項目で具体的な事実を提示する形式をとり、状況を語る文になりやすいといえる。

5.4　文脈の中に前提や大きなテーマがある

⑥ 文脈の中に前提や大きなテーマがある場合

一文の中には主題がないが、文章や段落全体のなかに、大まかな前提やテーマが見られることがある。次の文章では、作中人物の九郎助について語られていることが聞き手にも了解されている。

【7】（下線部が主題のない文）

かれは、筆を持ってぼんやり考えた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に坐っている浅太郎が、彼に云った。阿兄！　と云いながらも、語調だけは、目下を叱しているような口調だった。九郎助は、毎度のことながらむっとした。途端に、相手に対する烈しい競争心が——嫉妬がムラムラと彼の心に渦巻いた。

筆を持っている手が、少しブルブル顫えた。彼は、紙を身体で掩いかくすようにしながら、仮名で『くろすけ』と書いた。

書いてしまうと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、真中に置いてある空になった割籠の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中に直ぐ起った。

「賭博は打っても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のように、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガンガン鳴りひびくような気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロジロ見ているような気がして、どうしても顔を上げることが出来なかった。

（「入れ札」126-135）

下線部が主題のない文である。1文目の「かれ」とは九郎助を指している。下線部2文目は、知覚利用の文ではなく、事実の提示だと考えられる。ただし、九郎助を焦点にしていることは文脈から明らかである。この場合、文法的には矛盾するが、「九郎助について言うと」（前提）—「途端に、相手に対する烈しい競争心が——嫉妬がムラムラと彼の心に渦巻いた」（叙述）という意味に解釈できる。ここで事実の提示だけが表されているのは、文脈上で前提が何かわかっているからだと考えられる。下線部3文目、4文目、5文目も同様に考えられる。

次の用例は、段落よりも狭い範囲でテーマが設定されている場合である。

【8】

新派俳優の深井八輔は、例もの通り、正午近くになつて眼を覚した。

戸外はもう晴れ切つた秋の日である。彼は寝足りた眼をわざとらしくしばたゝいて、障子の硝子越しに青い空を見やると、思ひ切つて一つ大きな伸びをした。が、ふと其動作が吾乍ら誇張めいてゐるのに気がつくと、平常舞台での大袈裟な表情が、此処まで食ひ込んでゐるやうな気がして、思はず四辺を見巡し乍ら苦笑した。彼は俳優の中でも、実に天性の誇張家であつた。そして其誇張が過ぎて道化た気分を醸す処に、彼の役処の全生命が在つた。彼は新派中での最も有名な三枚目役者だつた。

(「虎」1-7)

下線部は作中人物についての解説である。具体的な物語場面の語りでなく、深井に関する性質・特徴が語られている。このような、具体的な時間に関わらない内容でも主題のないことがある。

前文から「そして其誇張が…」と、前文の一部分を引き継いで続いている。当該部分を抜き出してみる。

彼は俳優の中でも、実に天性の誇張家であつた。

そして其誇張が過ぎて道化た気分を醸す処に、彼の役処の全生命が在つた。

この２文の関係は次のように考えられる。

「ＡはＢであった。Ｂが作用することによって、ＡのＣが在った。」

つまり、Ａの詳細な情報が２文目に語られているということである。言い換えれば、もともと深井が主題となっていて、「彼についていえば」という前提があると考えられる。前提があることで、「事実の提示」がなされて

いるといえる。

5.5　文構造に関係する場合

文構造の性質のために、「は」による主題設定が見られない場合がある。

⑦ 述語部分が主題

「は」による主題はないが、述語部分が主題と考えられる用例がある。この場合「主題のない文」とはしない。このような文は、分裂文などの名称で指摘されてきている。次の下線部のような用例である。

【9】

彼は知人にこんな動物園へ行く所を、見つけられたく無いと思つた。がそれと同時に、誰かにひよいと出会つて、此の自分の妙な動物園行を、さりげなく笑ひ話の種にしたくも在つた。

丁度須田町から乗り合はした男が、うまく其要求を満たして呉れた。それはＪ新聞社に居る、見知り越しの劇評家だつた。深井は眉深に被つたソフトの下から、素早くそれと認めたが、向うでそれと気附いて呉れるまで、息を塞らせて待ち構へた。間もなく劇評家は彼と解ると、側へ寄つて来て私かに、親しげに、鷹揚に黙つて肩を叩いた。

（「虎」85-90）

下線部１文目は「うまく其要求を満たして呉れたのは、丁度須田町から乗り合はした男である」の意味である。述語部分に「其要求を」という既出の事柄があり、それに関係する「うまく其要求を満たして呉れた」ことが主題となり、「須田町から乗り合はした男」がその主題の焦点となっている。

ただし、原文の方が説明的でない。「～のは、～である。」とすると、語り手の操作が強く感じられる文となる。原文の「～が、～た。」の方が、状

況をそのまま語り「事実の提示」をしている印象が強い。

⑧ 条件節などが主題の代わりと考えられる場合

次の用例の下線部は「～と、…する」という条件文となっている。「…」に事態が提示されている。条件文なので、「…」には単なる事象がくることが予想できる。

男は何よりも退屈に苦しみました。人間共というものは退屈なものだ、と彼はつくづく思いました。彼はつまり人間がうるさいのでした。大きな犬が歩いていると、小さな犬が吠えます。男は吠えられる犬のようなものでした。彼はひがんだり嫉んだりすねたり考えたりすることが嫌いでした。山の獣や樹や川や鳥はうるさくはなかったがな、と彼は思いました。

（「桜の森の満開の下で」231-237）

この文は、具体的な場面の事態でない語りである。主節の「小さな犬が吠えます」には主題がないが、条件節が前提になって主節が語られていることから、主題に似た役割を果たしていると言える。

⑨「のだ」文等

「のだ」に前接する節部分には通常主題がない。次の下線部のような場合である。

【10】

夜の水の深い匂いや、聴えるか聴えないに石垣を洗っている潮ざいは、だんだんに道子の神経をなごました。型にはまった男の気持から、弟の妻までを所謂留守を待つ妻として垂れこめて暮させたがっている

信一。しかもその気分に托し絡め合わせて本来なら自分の家庭へ引きとらなければならない筈の老父母の世話までを、体よくこの際弟嫁にまかせられたならばと思いついたりしている兄夫婦のこせついた生きかたを考えると、そういう打算を知らない心で、家族の者に善意だけを向けて考えるしかない境遇におかれている良人の啓三が、道子に一層いとしく思われるのであった。遠い川上の方から両舷とマストのイルミネーションを夜空に美しく燦めかせながら、一艘の遊覧船がゆるやかに東京湾に向って下って来た。道子たちが休んでいる河岸を通り過ぎる時には、白く塗られた甲板に並んでこっちを物珍しそうに眺めている浴衣姿や開襟シャツの船客たちの目鼻立ちまで手にとるように見える程、イルミネーションは明るかった。船は音楽をものせて進んで行くのである。道子は、わきに佇んでいる義兄に対して融け合えない気持が益々動かしがたく感じられるにつけ、啓三への愛着の高まる気持で、凝っと遠ざかる船の音楽に耳を傾けていた。

（「築地河岸」98-103）

下線部は、欧文直訳体の長文である。文末が「のだった」であるが、主題は何であろうか。この文は、「…を考えると、～が～と思われるのであった」という構造で、啓三にかかる連体修飾節がかなり長い。構造をさらに細かく見ると、次のようになる。

…を考えると、「（連体修飾節）良人の啓三が、道子に一層いとしく思われる」のであった。

「のであった」の前に、命題相当の部分が提示されているといえる。命題は一項目の部分であるため、主題のない文になっている。このように、「のだ」文は、主題のない文になることがある。また、「のだ」文は命題相当の

事態を提示する形式なので、「事態の提示」をする文になりやすい。

しかし、「のだ」文は、それより前の文などに前提が示されるていることが多い。それが、「のだ」文の主題に当たるものと考えることができる。

またいっぽうで、主題「〜は」が示される「のだ」文もある。その場合、主題「〜は」に対する叙述部分は、文末「のだ」までを範囲にしていると考えられる。次の例文のような場合である。

彼は、昨日アメリカから帰国したのである。(作例)

この場合、「彼は」―「昨日アメリカから帰国したのである」という二つの部分からなっていると考えられる。詳細については別稿で論じたい。

なお、「わけだ」「だけだ」などのように、文末が「形式名詞＋だ」「副詞＋だ」の形式のものも同様に考えることができる。

5.6　主題のない文の現れる理由

多くの用例ではないが、④事実の提示の文において主題なしの文がときどき見られた。この場合、「状況は」―「〜である」という二項目が潜在的に存在するのではないか、という仮説を立てることとした。その理由の一つは、一項目の文は文脈のない状況では不自然に感じられるということである。もう一つは、主題なしの「事実の提示」の文が、状況を説明していることが明らかなときに出現する傾向があるということである。

主題なしの文が非常に多く見られたのは、①眼前描写や②知覚利用の語りにおいてであった。眼前描写や知覚利用の語りは、物語世界のその場の状況が主題として既に受け入れられているからだと考えることができる。何について語っているのかは了解済みなので、結果的に一項目だけが語られるのであろう。次に主題なしの文が多く見られたのは、③引用構文の場合であった。引用構文の場合の多くが、眼前描写や知覚利用の語りであるためだと考

えられる。

⑤非情物主語の文のなかにも主語のない文が見られた。その理由については十分に説明することができなかった。ただし、非情物主語の文では、一項目で具体的な事実を提示し、状況を語る文になりやすいことが指摘できた。

また、主題のない文のなかには、⑥文脈の中に前提や大きなテーマがある場合があった。そのような文では、「～は」という形式で主題を文中に補うことが難しくても、その前提やテーマが意識されている。それらの前提やテーマがない状態で、単独の文として存在することはできないのである。

以上のように①～⑥の場合を検討したが、主題なしの文であっても、なんらかの潜在的な主題や前提が存在していると考えるべきだと結論づけたい。

6　おわりに

主題のない文について、大きな特徴として「一項目からなり、何かを結びつける形式ではない。」ことを挙げた。

そのうえで、小説において「主題のない文」になる場合を次のようにまとめて挙げた。

① 知覚体験性・眼前描写性のある文
② 作中人物の知覚を利用した文
③ 引用構文
④ 事実の提示
⑤ 非情物主語の文
⑥ 文脈の中に前提や大きなテーマがある場合

以上の①～⑥は、いずれも主題が明示されていなくても、何らかの潜在的な主題や前提が存在していると考えることを提案した。

〈参考文献〉

尾上圭介（1973）「文核と結文の枠――「ハ」と「ガ」の用法をめぐって――」『言語研究』63 日本言語学会
現代日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法6　第11部複文』くろしお出版
西山佑司（1989）「「象は鼻が長い」構文について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』21 慶應義塾大学
丹羽哲也（2006）『日本語の題目文』和泉書院
野田尚史（1984）「有題文と無題文――新聞記事の冒頭文を例にして」『国語学』136
野田尚史（1989）「真性モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
野田尚史（1996）『新日本文法選書「は」と「が」』くろしお出版
益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
三上　章（1960）『象は鼻が長い――日本文法入門――』くろしお出版
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
森山卓郎他（2000）『日本語の文法3　モダリティ』岩波書店
日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店

（いしで・やすお　商学部専任教授）